

## 山口県宇部市の水田面積の変遷

## —宇部市全域と常盤用水路周辺の比較—

準会員 ○良田 允 1\*  
正会員 岡松 道雄 2\*  
同 宋 俊煥 3\*

用水路 水田 宅地化  
灌漑 管理道 農地転用

## 1. はじめに

## 1.1 研究の背景と目的

地方中小都市は日本の主要都市に比べ変遷過程が多様、複雑であるため、研究対象として体系的に整理されたとはいえず、資料も少ない。そのため重要な遺産であっても都市計画の体系に組み込まれないことがある。宇部市の常盤用水路は、毛利藩永代家老福原氏により田畑の開作政策が進められ、1701年に常盤池、常盤用水路が完成し、荒地が305町9反7畝(約303.5ha)の水田となった<sup>1)</sup>。しかし現在は多くの水田が宅地化されており、水が流れていない用水路も存在している。常盤用水路や宇部市の変容について十分に知られないまま開発が進み、遺産の構成要素が消滅することが危惧される。

本研究では常盤用水路の現状や水田面積の変遷を調査し、それらの変遷過程を明らかにすることで用水路の現代における価値を考察することを目的とする。

## 1.2 研究の方法

文献・資料調査、宇部市ふるさとコンパニオンの会<sup>注1)</sup>の方からのヒアリングより、「常盤用水路」に関する基本情報や現状について整理する。また、宇部市の統計書<sup>2)</sup>、国土地理院の航空写真<sup>3)</sup>から水田面積の変遷を宇部市全体、常盤用水路の及ぶ範囲で分けて明らかにする。

## 2. 常盤用水路の概要と現状

開作当時は全て稲作のための灌漑施設であり、常盤池の2ヶ所(本土手・切貫)から水を放水している。放水期間は6月から9月中旬までであり、それ以外の期間で常盤池に水を貯める計画となっていた。用水路は徐々に枝分かれをしており、広い範囲に水が行き渡るようにしている(図1)。計画当初は水を無駄にできなかったため、悪水路に流れるまでに多くの水田に流れるよう計画されていた。さらに用水路沿いには用水路を管理するための道(以下「管理道」)が整備されている。

常盤用水路は図1のように主軸となる水路(以下「主水路」と)、主水路から枝分かれし水田に水を供給する水路で構成される。主水路は水路の末端部に水田があることや雨水を流す役割のため現在も利用されている。しかし枝分かれしている用水路は、水田が転用されることによ

り、水を止められ利用されていない。一方で水路沿いの緩勾配を利用し、通り抜けとして利用されている。



図1 常盤用水路の構成

## 3. 宇部市における水田面積の変遷

## 3.1 水田面積の変遷

水田面積の変遷を宇部市の統計書や航空写真をもとに宇部市全体と常盤用水路周辺に分けて調査した。

宇部市全体における水田面積は減少傾向にあり、2004年の楠町との合併後も減少し続けている(図2)。常盤用水路周辺の水田面積も全体同様に減少傾向にある(図2)。1947年から1975年にかけて大幅な減少が確認でき、現在は1947年に比べ約1/70ほどになっている(図2)。

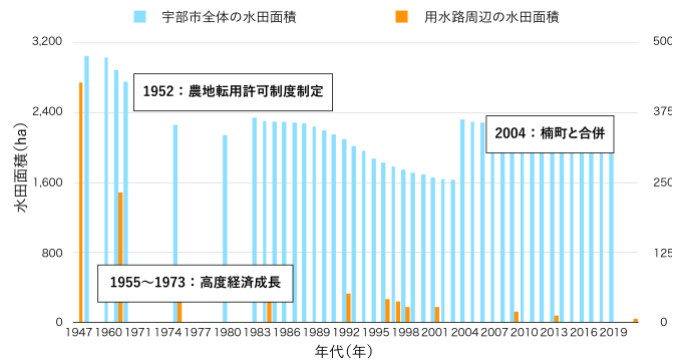


図2 宇部市全体と常盤用水路周辺の水田面積の変遷

### 3.2 町丁目別の比較

常盤用水路周辺の水田面積を町丁目別に比較を行い（図3、4）、2本の用水路の放水地点を中心にA、B、Cの3つのエリアに分けて傾向をみた。

エリアごとに比較する

表1 エリアごとの水田面積の変遷

と、放水地点に近いAから順に水田が多く造成していた。1947年以降もAを中心に水田が残っている。Cでは1975年以降岬町以外の地区の面積が0になっている。

年代	A	B	C	合計
1947	2862300	1182900	447900	4293000
1965	1539600	574100	214800	2327500
1975	676900	153300	51200	881300
1984	628600	109200	44200	782000
1992	416500	55400	41700	513600
1996	332200	53200	24400	409800
1997	305100	44100	24400	373600
1998	219600	37100	22100	278800
2001	219600	37100	17100	273800
2009	147600	32500	7000	187100
2013	102200	13900	3000	119100
2022	46200	13900	2000	62100

地区ごとに比較すると1947年は多少のばらつきはあるが、水田が各地区に残っていた。1947年から1975年にかけて則貞、東梶返、恩田、草江の水田が多く残ったことがわかる。しかし、元々水田面積が少ない地区を中心に水田面積が0になる地区が現れ、調査を行った27地区のうち15地区の水田面積が0であることが明らかになった。則貞は1947年以降、常盤用水路周辺では最も水田面積を有していたが、2013年に恩田、東梶返を下回り、2022年には東梶返に比べ半分ほどの水田面積になったことが読み取れる。これは、2013年あたりから則貞で水田が宅地などに頻繁に転用されたことによる。

### 4. 常盤用水路と水田面積の減少傾向の比較

第2章では常盤用水路の減少傾向について確認し、主水路の末端部の水田や雨水を流す役割に利用されており、それ以外の枝分かれしている水路は近年みられる宅地化により利用されていないという知見を得た。また水田面積の変遷について、多くあった水田も現在では数ヶ所に減少していることが明らかになり、減少傾向も地区ごとに偏りがあることが分かった。これらのことから水田が減少するにつれて、枝分かれしている細い用水路も利用されなくなるが、主水路はまだ残存する水田のために利用されていることが分かった。

### 5. おわりに

戦後に急速に減少した常盤用水路周辺の水田は、2ヶ所の放水地点に遠い場所から減少した。放水地点に近い則貞、東梶返、恩田、草江の4地区は多くの水田を有していたが、近年多くみられる宅地化により残り僅かである。常盤用水路は水田の減少に伴い閉鎖され始めているが、主水路は残存する水田、雨水利用のために残っている。また、常盤用水路沿いの管理道は緩勾配、1.8mの幅員により通り抜けとしても利用されている。残り続ける主水路は、今後水田が無くなっても宇部の歴史、詳しく地形を読み取った常盤用水路の固有性を残す上で重要なものであり、残り続ける新たな活用の考察が必要である。

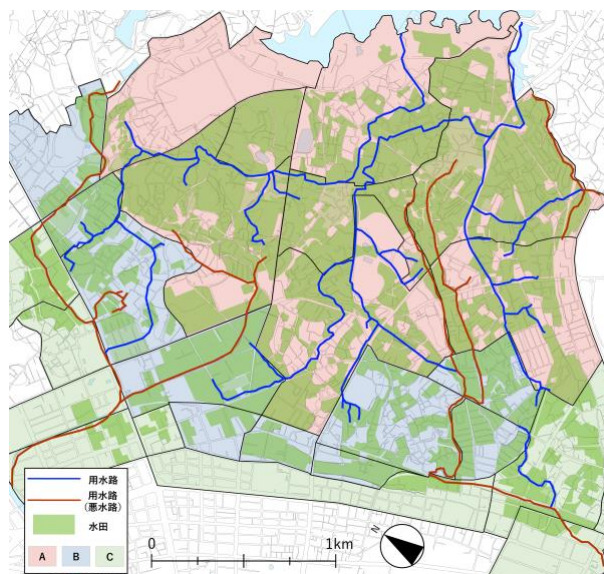


図3 常盤用水路の及ぶ範囲と水田分布（1947）

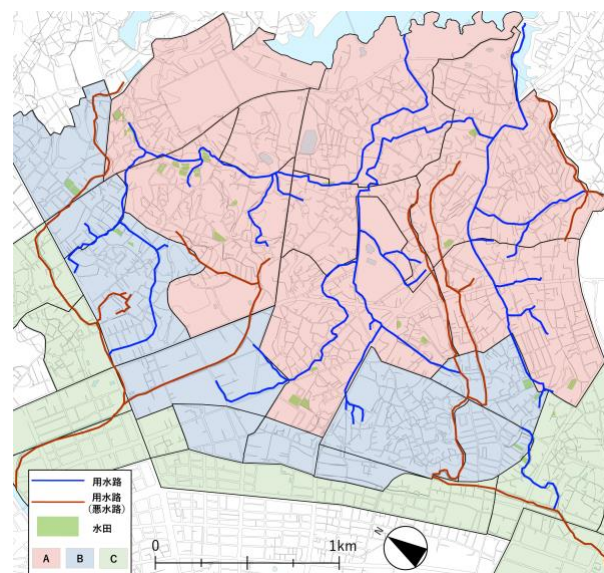


図4 常盤用水路の及ぶ範囲と水田分布（2022）

### 注釈

注1) 健康づくり・医療、社会教育の推進、まちづくりの推進、学術・文化芸術の振興、国際協力・交流、子供の健全育成を行っている市民活動団体

### 参考文献

- 1) 世界灌漑施設遺産 常盤湖  
<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/machizukuri/toshikeikaku/tokiwakouen/1005704/1002351.html>（最終閲覧日：2022年12月26日）
- 2) 宇部市統計書  
<https://www.city.ube.yamaguchi.jp/shisei/toukei/toukeisho/index.html>（最終閲覧日：2022年12月26日）
- 3) 国土交通省国土地理院地図・空中写真閲覧サービス  
<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>（最終閲覧日：2022年12月14日）

1\*山口大学大学院創成科学研究科 博士前期課程  
 2\*山口大学大学院創生科学研究科 教授・博士（工学）  
 3\*山口大学大学院創生科学研究科 准教授・博士（環境学）

Graduate Student, Department of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ.  
 Dr.Eng., Prof. Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ.  
 Dr.Env., Associate Prof. Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Yamaguchi Univ.